



西

公羽

冊

中村
庫



曩時平安林九來。安。擢。氏。賣。燈。餘。任。所。著。之。書。若。平。卷。其。紀。事。也。本。邦。今。亡。人。物。而。其。懷。柔。雖。君。子。所。未。信。託。彼。論。是。假。名。寓。意。專。在。勸。懲。矣。予。偶。得。此。日。之。閑。戲。効。其。頗。罕。著。此。五。言。

鄙陋碎瑣。豈備識者之觀。乎。唯為女兒忘睡。具耳。編。來。日。小。園。菊。已。事。閑。佳。色。燦。燦。玉。香。滿。室。終。題。曰。菊。子。安。永。六。年。丁。酉。九。月。款。且。括。園。山。人。書。

五

今古奇談新編

條名

第一卷

第二卷

第三卷

武藏 盗賊 案小 到る
雲 魂 母 氏 鼓 也
死 後 又 忠 を 盡 と
山 中 乃 妖 獣
宗 岩 玄 束 が 傳
橋 井 怪 子 童

第四卷

附録

幻術 乃 夷 戒
怪 小 童 て 根 人 形
少年 十 倫 盟
怪 漢 振 舞

以上

今古奇談新草卷之一

武藏到賊寨

海内久く昇平の世に濱の黎民暇ふ干戈の
吏を以て身に金鼓の喧き武官を各城と安
んて快樂の世に過る誰か幸とせざるや
戦争の目ふりて軍馬は狼藉を恐るのふ
らど強賊巨望所に徘徊して暴逆を逞め
あふ武官を逐て資財を掠るは憂若輩て
云へり予當時細柳ふ名を譽えりて武官
の年の以て西國を當く世應てふ紀別録に

色はあつておしきも目の言ふに城の
の聲高く新草の語人もたつて城の
一人とていふふ城の六十とていふ殊
勝りたる老僧は武官の如く物に習接の
まぐを忘るに信の如く持てこまを
以て信を寺にりて立てて一和を以て
んて武官の如くも武官の日を小僧
宵更けり先の如くも武官の如くも
御へるに信を寺の如くも武官の如くも
十町すくも信を寺の如くも武官の如くも

程をたや^うふ^ふは僧今^い五^ご町^{ちやう}ありと^と言^いふ又^{また}寺^{てら}里^りを
り^りす^すふ^ふた^たい^いふ^ふ寺^{てら}ふ^ふも^もさ^さも^もで^で怪^{あや}し^しみ^みふ^ふふ^ふ
何^{なん}う^う炬^{たき}を^をお^おゆ^ゆり^りて^てある^{ある}ち^ちあ^あり^りを^をつ^つい^いく^く刀^{やいば}金^{かね}目^め眼^{がん}
す^する^るく^く類^{るい}懸^{けん}あ^あた^た人^{ひと}さ^さる^る男^{おとこ}長^{なが}さ^さ刀^{やいば}を^を携^もへ^へ衣^い被^ひの
敷^{しき}を^を多く^{おほく}縄^{なは}を^をか^かお^おる^るを^を持^もて^てわ^わや^やけ^ける^る体^{てい}
ま^まう^うい^い傍^{はた}を^を刀^{やいば}を^を懸^{けん}そ^そ一^{いち}む^む頼^{たの}い^いづ^づと^とあ^あり^りま^まう^う
中^{なかつ}視^しを^をく^くま^ま傍^{はた}も^も故^{ゆゑ}今^{いま}宵^よハ^ハ何^{なん}も^もあ^ある^るま^まう^うく^く
ま^まう^うや^やも^もで^で懸^{けん}る^る刀^{やいば}を^を何^{なん}も^もい^いふ^ふ武^ぶ藏^{ざう}も^もさ^さう^うと^とい^いは^はれ^れ
け^け傍^{はた}あ^あす^する^るく^く械^が首^{くび}さ^さる^るべ^べ一^{いち}家^けと^と懸^{けん}て^て剥^{はく}ち^ちんと
歎^{なげ}す^する^るま^まう^うむ^むか^かも^もさ^さう^うた^ため^めい^いく^く程^{ほど}力^{ちから}を^をそ^そす^すも^も

い^いさ^さう^う我^{われ}と^とむ^むさ^さる^るく^くと^とい^いん^んや^やう^うく^くお^おか^から^らふ^ふも^もを^を
を^を刀^{やいば}を^をく^く冷^{ひや}み^みさ^さる^る所^{ところ}又^{また}し^しか^かう^う同^{どう}く^くに^に懸^{けん}れ^れ
足^{あし}さ^さる^る男^{おとこ}と^と何^{なん}人^{ひと}者^{もの}刀^{やいば}を^を帯^{おび}け^け炬^{たき}を^を持^もち^ち傍^{はた}と^と刀^{やいば}を^を
金^{かね}銀^{ぎん}す^すま^ま僧^{そう}武^ぶ藏^{ざう}を^を抱^{かか}ぎ^ぎけ^け傍^{はた}人^{ひと}金^{かね}銀^{ぎん}ハ^ハ持^もち^ちま^ま
た^た常^{じょう}と^とる^るま^まう^うれ^れ刀^{やいば}名^な他^たた^たる^るく^くと^と我^{われ}救^{きう}ひ^ひ業^{ごう}とな^な
り^り切^きり^りし^して^てく^く何^{なん}い^いか^かる^る今^{いま}懸^{けん}く^くに^に後^{あと}ハ^ハ
彼^かづ^づつ^つに^に申^{まを}い^いは^はる^るま^まう^うさ^さる^るも^もさ^さう^うり^りに^に門^{かど}の^のも^もあ^あ
ら^らん^んく^くり^りあ^ある^るま^まう^う花^{はな}中^{なかつ}れ^れも^も同^{どう}く^くと^とい^いふ^ふも^もゆ^ゆげ^げ
し^して^ても^も瓶^{びん}を^を負^おさ^さる^る持^もち^ち剥^{はく}ち^ちり^りと^とい^いふ^ふ知^ちり^り己^{おのれ}ち^ち
か^かえ^える^る所^{ところ}ふ^ふ懸^{けん}を^をか^かけて^てお^おめ^め居^ゐる^るぬ^ぬ男^{おとこ}り^りい^いと^とえ^え

の望城武義をぬすれ令惜くばす衣被大小を以て
して立ゆきしつふ武義がも勅で我ふ狼
藉をささんとするハ女中死助のふふなりたるを
乃に病者同ドくありあきよといつふ侍は
態ありて二人をももりて投刺下ば侍も衣袖より
小銃とありて逃ぐと切かき下武義も抜ありて我
ひふふふあらず秘術をそつや時つとらう
偏にたる一人の望城やうくと起さる後う武義を
切傷さんと遠く何人を僧をけりする等く然と
るや重我年月秘術をぬくまうね連人はあ合ども



いまだ君がどれたれも刀を是に依て一変の經るべき
なり。舊劍を納め多き事とていひく持するを授出せば
武藏は沖のやび女我術ふ及ばざるを知てたゞう害せ
んとする如き事もふかけて王民の害と爲んと又切
まば傍より身をかくし何事ぞりぬ。逃がる事ぬ
武藏四方を刀を以てして甲人の望敵といふものも逃
しや。海を渡る今いよいよ去るべき事なれど
ひねりおかしき事なきにや。討てんも計られ
ぬとんと配てりく来し人出んとす。是たえより不
棄肉の土地より一に帰來る事。方角を辨せし

乃小迷ひて不意又敵人の望城より小銃砲を射あ
けりしに圍すべし火蓋を叩くも今も勢ふけり
或は防ぎ方便なく圓手も今宵放ふに敢
て一命と失ふ我武運の拙きと齒ぐとて
怒まる所其のむね傳へりて素敵十人のとりわ
てはさし不潔し重々君いふ中に精神を励し天魔
はとく働きたり死なせめて前後を圍むなむ
付りんといふ要りもた然る劍術小者なる事は
なれどもそぞろに二つあり今敵死害せんといふ
わづらひを盡して金銀をくくるとも我武も偽

八 第 章

て敵を先づ場と巡るんとす河は遠くへまき
くく渡るべし要くゆりうに接しに
とそよむ僧侶は銃砲を望城をよせ途中
ありし河は深き我橋は堅固なるをう
む敵のやんとす不意に我も角りて案内
つと一町半の一角の火柱より敵の大砲と
つらねておしし僧侶を射くゆへに
藤を盡し金銀輝き砲煙のなるを愛せ間
をぬておししと上座小僧は
袴をゆるしと熱心に飛を射し果実を鼻を

ふせりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
ふせりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
をけりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
中く尋常れり力もみく彼を征んる及んる
軽くハまう力を借て彼を亡くし海く厚く小威
せんりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
旧悪懺悔く昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
世のふ小害を除くろ夫の冥加もけんと
くま僧恨ひ座を立ちてけりあるとく
十つりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を

わくく昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
悪の軍とありくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
是くくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
郭くくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
をくくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
は武蔵もかりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
もけりくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
先くくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を
りくくもの昔根かりくも人にも流石骨肉の悪を

招ふと侍へしを周堂を召して座をさせ武藏と
侍ひし中敷とせし唐土座を敷居の御堂あり
望城を平生武藏と相打ちし所をせりく膝は
本刀をあの斬ひし所より十尋餘の板より僧
まゐりし僧においせし何ぞ君が神妙れ
を以て彼を教へし来ぐみ果を断居るを
謂ふ僧の事をたすきし本刀を携ておを
武藏も此の板をぬきおをりて立ちし
は彼れ又座をある人より相打ちし
けし武藏を容易に打ち能ふ今も多

[illegible]

ころり或は貧窮より過る妻子一族をなくたる
 づき方りく飢凍で死する者一に或は哀なる
 ことはいはゆる童子をふとと堀屍を掘りけり
 せんといふも余の童子いじく掘りき骸骨見る
 ころりころりいふころりもなほ不葬やんといふ人
 ぞやと痛て知いあるを曹十郎は急角哀を
 保くおぼく独りころりたる流と汲りて死よそ
 ぶ雲懷をたふさ清めて幸あるをふとと堀
 んと掘りまうし小き秋めく去を堀りて甲
 斐く為屍と埋りし金佛救十遍唱へ回仰て

家小ゆりころりつきの重きふもころりころり曹
 十郎が父母小若きとて父母といふあるれとて
 られた様あるといひなれりる物中へ入る可なり
 ころりころりころりころりころりころりころり
 様ある者とあふふ事けりてころり何とあ
 せりてころりわころりふてめりる表に様ある
 ころりころりころり入るふと曹十郎は父母の怒れ恐
 り幼ふといふせんあをとりて位居る遍り
 りるころりころりころりころりころりころり
 不埒に様あるころり風難とめる水もわを

とれおしとて後矣る人何ぞたけ曹十郎ッ
あふあり歎くふなりと我父母は死してさせん
とかなとすう今日も次女が死に候て屍の
様とて涙を長く死後の死状候へば一遍は面
白紙にしろ厚恩を報ぜんるとて經き咒文と教
こそを唱つ時へづらふありても我女死候は
ありあの事と告ぐせ月此上をち候すべしとい
合あけは後來聰明なり曹十郎咒文とて速そ
よ笑へとも唱へるまでとてハいろどくして決ち
月をみたりまより曹十郎のへたどく咒文を



唱^{うた}ふも^も又^{また}彼^{かれ}等^ら祇^{ただ}に^に是^{こゝ}より^{より}て^てあ^あら^らう^うと^と教^{おし}へ
 る^{しる}べ^べなる^{なる}中^{うち}より^{より}曹^{そう}十^{じゅう}年^{ねん}長^{ちやう}す^すに^に以^{もつ}て^て自^{みづか}ら^ら不^ふ慮^{りょ}
 物^{もの}と^と通^{つう}徹^{てつ}と^と種^{しゆ}々^々の^の奇^き物^{ぶつ}と^とり^り人^{ひと}の^の妖^{よう}邪^{じゃ}と^と優^{ゆう}と
 劣^{りやく}と^とと^と私^{わたくし}に^に除^{のぞ}く^く或^{ある}は^は国^{くに}家^けを^を知^しが^がた^た病^{びやう}危^きを^を
 を^をう^うく^く毎^{まい}日^{にち}知^して^て茶^{ちや}法^{ぽう}と^とり^り人^{ひと}世^よ人^{にん}の^の憂^{うれ}と^とつ^つと^とて^て救^{きう}
 ひ^ひ脚^{けう}々^々と^と迫^{せま}る^るに^に信^{しん}人^{にん}を^を救^{きう}する^る者^{もの}多^{おほ}く^く禮^{らい}謝^{しゃ}の^の言^{こと}
 物^{もの}を^を送^{おく}る^るは^は我^{われ}父^ふ母^ぼの^の蔭^{かげ}ふ^ふり^りて^て耕^こは^はに^に耕^こふ^ふを^を
 し^しから^らひ^ひぶ^ぶあ^あふ^ふ不^ふ慮^{りょ}家^けを^をあ^あら^らう^うか^かう^うも^もり^りと^と同^{どう}
 解^{かい}して^て一^{いつ}つ^つも^も信^{しん}ら^らう^うり^り形^{かたち}に^に常^{とこ}に^に新^{あらた}く^く新^{あらた}か^かう^うハ
 強^{かう}愈^{よく}久^くく^く或^{ある}は^は急^{きふ}と^と意^いを^を失^{うしな}は^はる^る具^ぐ足^{そく}屋^{おく}何^{なん}れ^れと^とて

家内鏡みてまゐれ婢僕と云はるは徳園武家乃
軍用と辨じ世と安く送る者ありし曹十郎が奇
特の術ある小政伏し厚く接待して万計のとき
小政は侍共の同くふ或は酒肴と受け親
族相友を令し程を事ありし曹十郎も同じ
招き終日種々杯酒は音無と催し其
及び終つて終る人曰はる西のありと
あるく終ひ礼奉小政能く白拍子の都より下
つてゐる我家は肩しゆり一さしやうて今も
席上の奥に居るといふは常の人ありと云

翁草

彼より来る白拍子娘は公痛をいれ入り座を
わきまめく女抱きと盡ししをも事切しとや
蘇中さびしくある小主人も又は終るわきま果てると
見し曹十郎もと描き暇月して終然終るて有
白拍子の傭小屋の婢女小宵より何と懐安ふは
しやるまはさきばいあの女は終入せんともある窓乃
ゆりし来た衣とある一人のあやれ男入来しと終
しやるまはさきばいあの女は終入せんともある窓乃
救盡く死すふわす妖魔のふ小泥と誘ふとめ
うまおはれとて養生さすといふ白拍子首は

石を石を石はあつたすんではとけひがう時
ゆへ令般へうけく降くまなりより豪家なるまじ
大勢の人を道回よりちをへ候といふも穿鑿しあ
まへはうく白牛をぬきなり屠屋を斬りて矢石
を擲て洞へまじ曹十希す白拍子と聞きなり室
の内は榻をとりてまじに外へあふたなる魔と居
かの石をうへ入新板をわく牛れそとよふふく
のせき荒をぬき素の上もみ焚き居てうのくく
何やん呪文と唱へまじあふたて四方の窓及び戸を
固く閉め家の男女ふれをぬきひたりなりとまじ

八翁草

一ノ廿一

海へ潮へう晨後告げう牛れぬるあすう一十時あふ
をぬき入て養生してあふさそとあふあて曹十希へ
家へゆりけるまじあふたてうのくくあふたを付て
拍子と聞へりまじは遠くは境の牛れ人ふあふ
よつてまじあふたをひきりてあふたて外へ白拍子りて
あふたて魔へへ候は乾きうそと牛れあふたといひ
たりまじあふたのあふたなるまじあふた白拍子にまじ
へあふたあふたあふたあふたあふたあふたあふた
あふたあふたあふたあふたあふたあふたあふた
あふたあふたあふたあふたあふたあふたあふた
あふたあふたあふたあふたあふたあふたあふた

あり我といふて切なすふむろに懐く拒み防ん
てすまも力なぞでんとうく如面は野雲馬に歩
のせまぬ中とめりうと見て數十町とだて程なく
室宇庭藁う所ふ即うふ門は蛇とまけはらひ
まて来れ夜を更うう人救世居る比海雲と足
はるふ我來るとなる伴て一うとゆまうと恐ろしな
う庭とめてまよまをそめて中うんま
まねれとうひうう所ふ如面は大小牛けりお登り
まて中居るまといひおまのく家通て狼狽さ
内白れれ歌てま長丈短く足ゆる是れのおふ小戯と
ふかてはうくと入るはとて所あるとく園楽うと

公羽草

三十三

なとまの性まをて恐るれは是れのお家と春う
面は門おふてまのいゆううれめあひるをま
やむう春ううる一睡れ所ふ我とて入るて受て
おけいばまの門は外わうと如る人まの如を
宗十郎ふたつぬま文は河の事うまか極く不意の
おとるうらうまううとまん一生ま高とひるを百
葉のまと保らうもむる宮ううとや城ふ希世の美人
ふ

今古奇談新草巻一終

有古筆

四

一

大平氏

明治三十四年
三月廿三日